

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2015年08月

企業から学ぶ現場の知恵
(② 特性要因図)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com

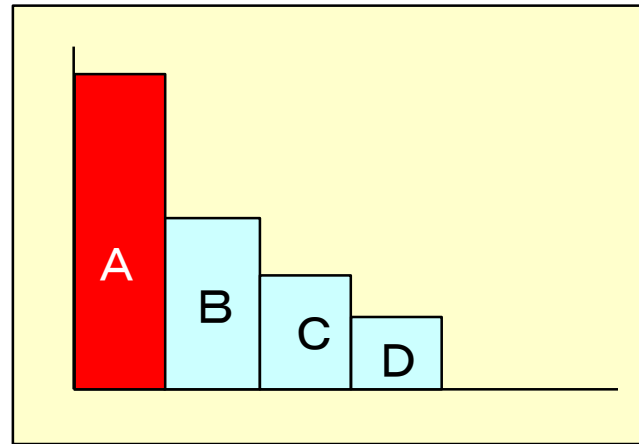


ピカイチ先生

ピカイチ先生

検索

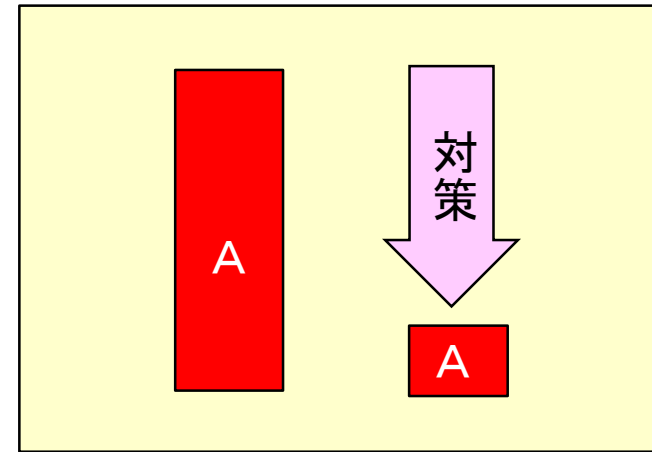
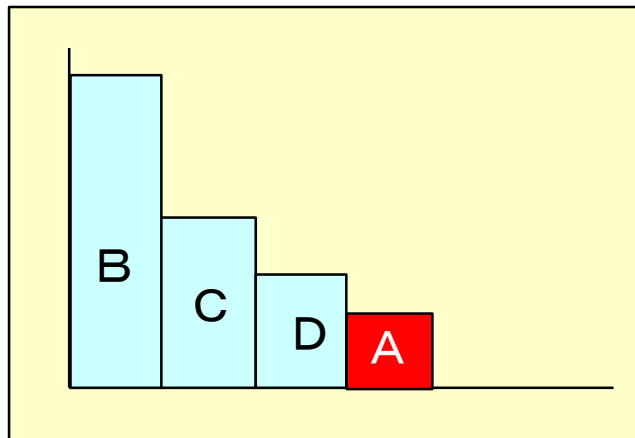
パレートの法則とPDCA



P(計画)



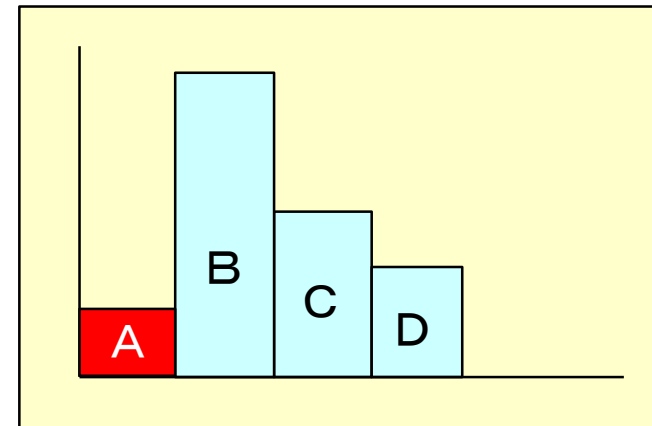
A(見直し)



D(実行)



C(確認)



「適当に」を続ける

人生を旅に譬えるのであれば、人生の旅には目的地がありません。というより、目的地があってはならないのです。たとえば東京から出発して、目的地である大阪に着いて、それで「はい、終わり」というわけではありません。

人生の旅は、その道中がすべてです。プロセスだけがすべてです。人間がある方向を目指して歩いて行く、その歩みそのものが人生です。たとえれば、人生は急いではいけません。走るなんてとんでもない。

(中略)

こう考えるとよいでしょう。東京から大阪まで、約500キロあります。ある人は、1日10キロのペースで旅をしました。すると50日で大阪に着きます。

別の人は、寝食を忘れて旅をします。そのため彼は途中で病気になって寝込み、結局100日かかりました。

3人目は死に物狂いで走りました。彼は箱根の山で心臓麻痺を起して死んでしまい、大阪に着くことができなかったのです。

やはりいい加減がいいのです。
では、いい加減はどれくらいのペースでしょうか？

『デタラメ・あきらめ・いい加減』(ひろさちや)より

業務改善とは

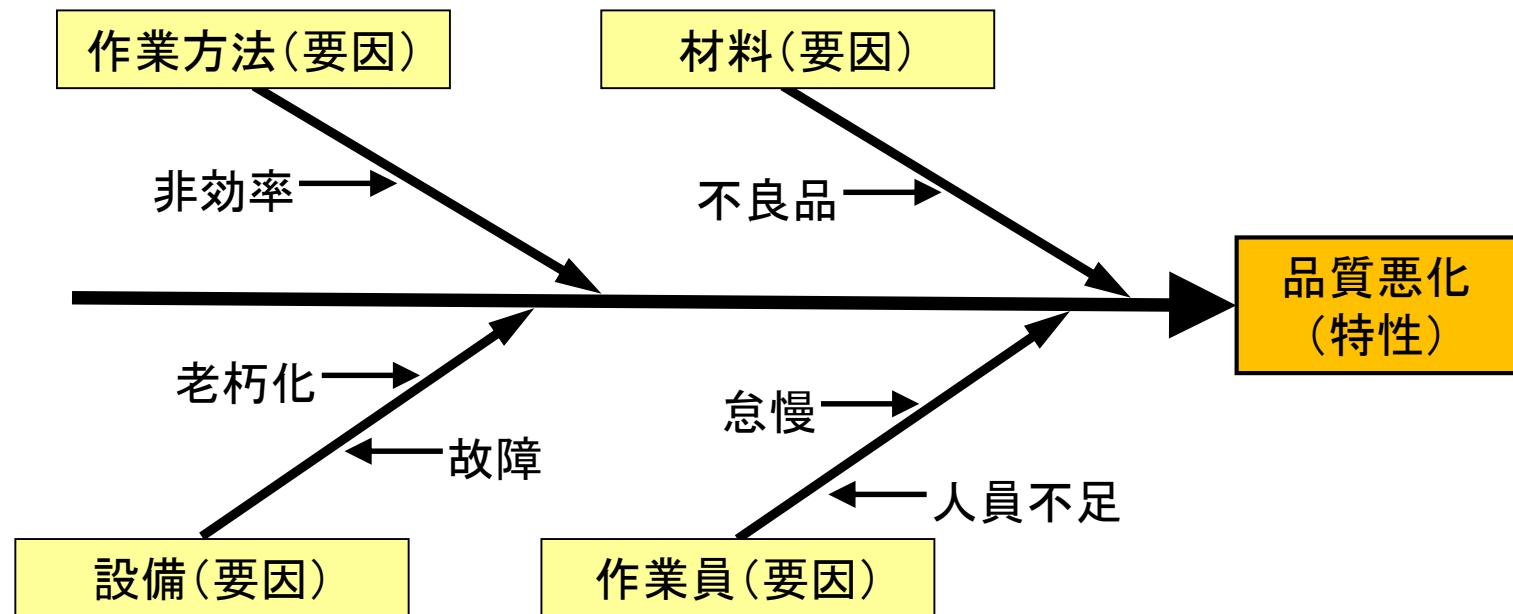
- どこに問題があるのか？
- なぜ問題なのか？

を**把握**し、

改善案を**立案**する。

「特性要因図」とは？

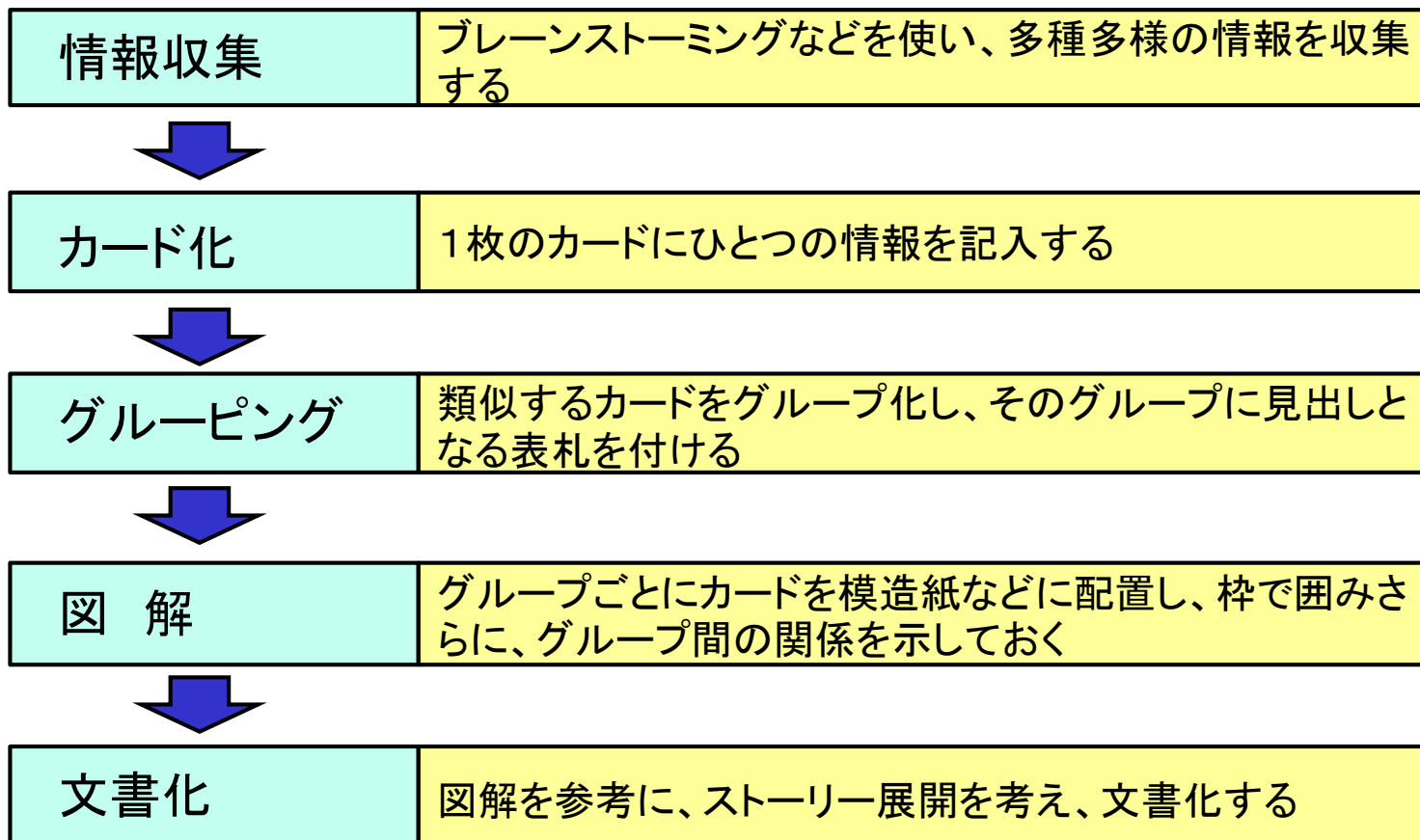
特性と要因の関係を、系統的に線で結んで(魚の骨のよう)に表したものの。



「特性要因図」をつくる① (KJ法)

定性的情報をボトムアップ的にまとめる方法。

あるテーマに関する思いや事実を単位化し、グループ化と抽象化を繰り返して統合し、最終的に構造化して状況をはっきりさせ、解決策を見出す方法(問題解決の技法)

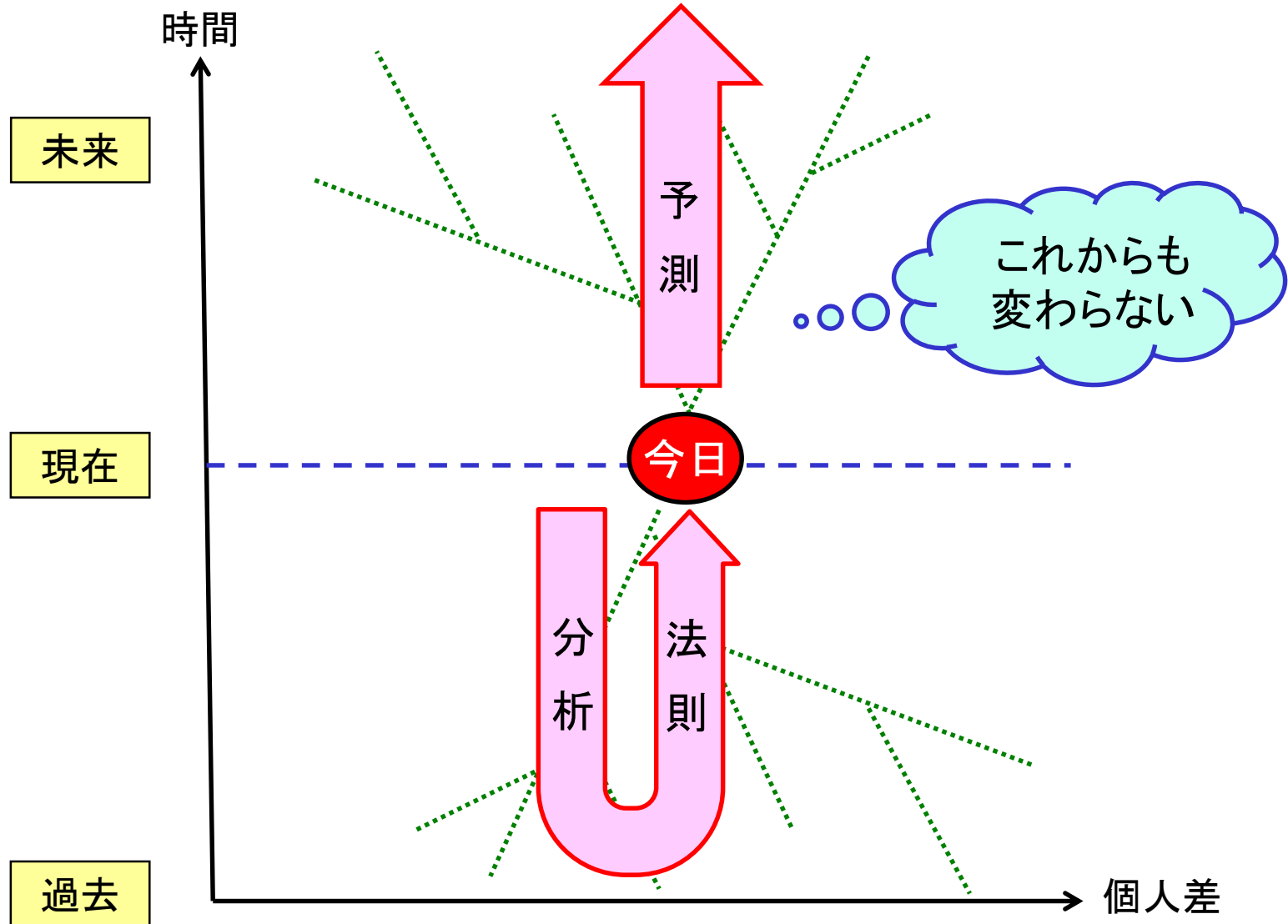


「特性要因図」をつくる②（ブレインストーミング）

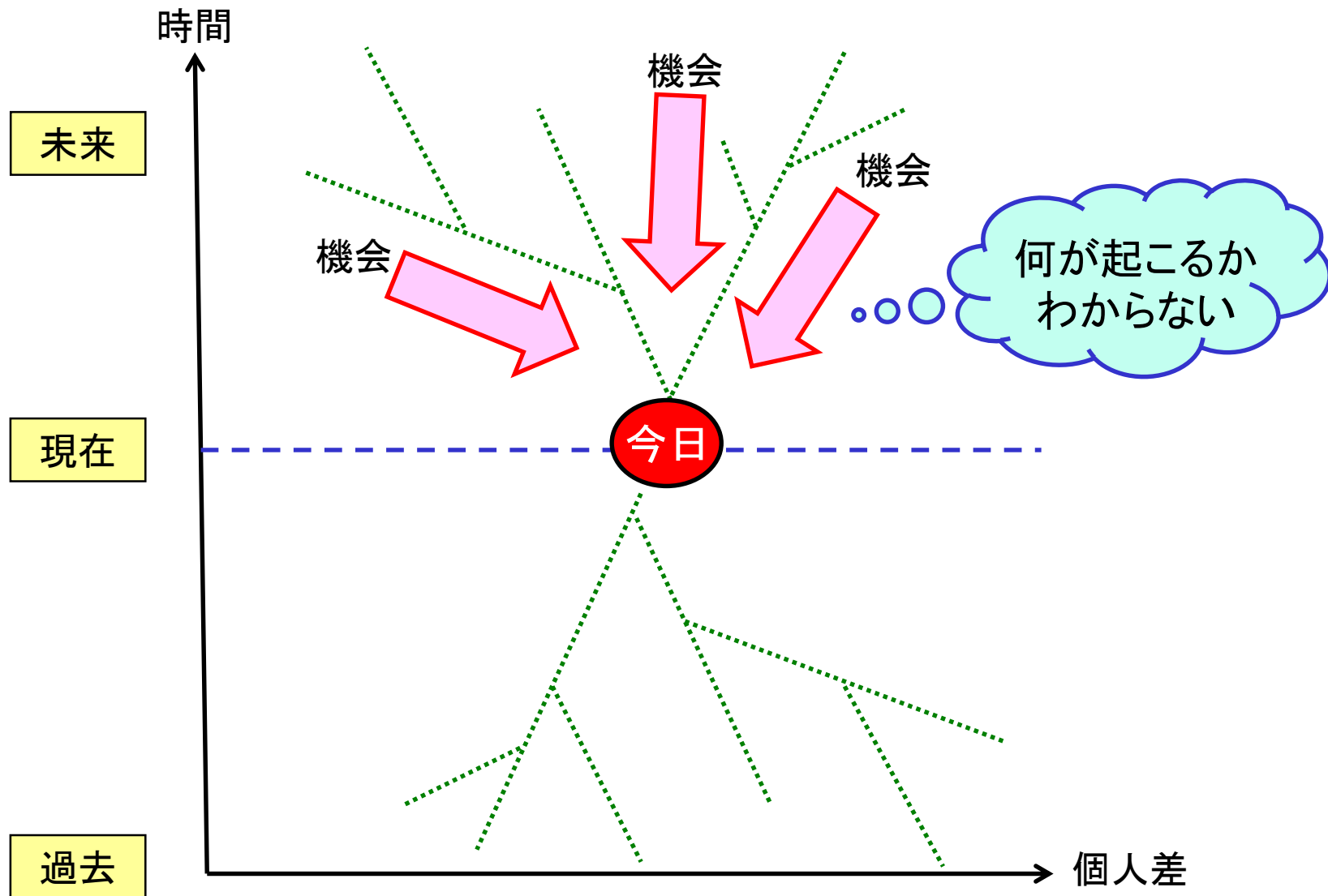
ブレイン（brain：脳）とストーム（storm：嵐）を組み合わせた言葉で、日本語に訳すと、“脳に嵐をおこす”という意味。独創的なアイデアの創出に適している。

ルール	内容
批判禁止	人の意見に対して、批判したり批評したりしない。批判したり、批評したりして発言が抑止されてしまうことを防ぐ。
質より量	短時間に、できるだけ多くの意見が出るようにする。意見の量は多いほど質のよい解決策が見つかる可能性がある。
自由奔放	既成概念や固定概念にとらわれず、自由に発言できるようにする。多少テーマから脱線しても、その中に突拍子もないアイデアが隠れていることがある。
結合・便乗	アイデアとアイデアの結合や、他人のアイデアを利用して改善する。新たなアイデアが創出されることが期待できる。

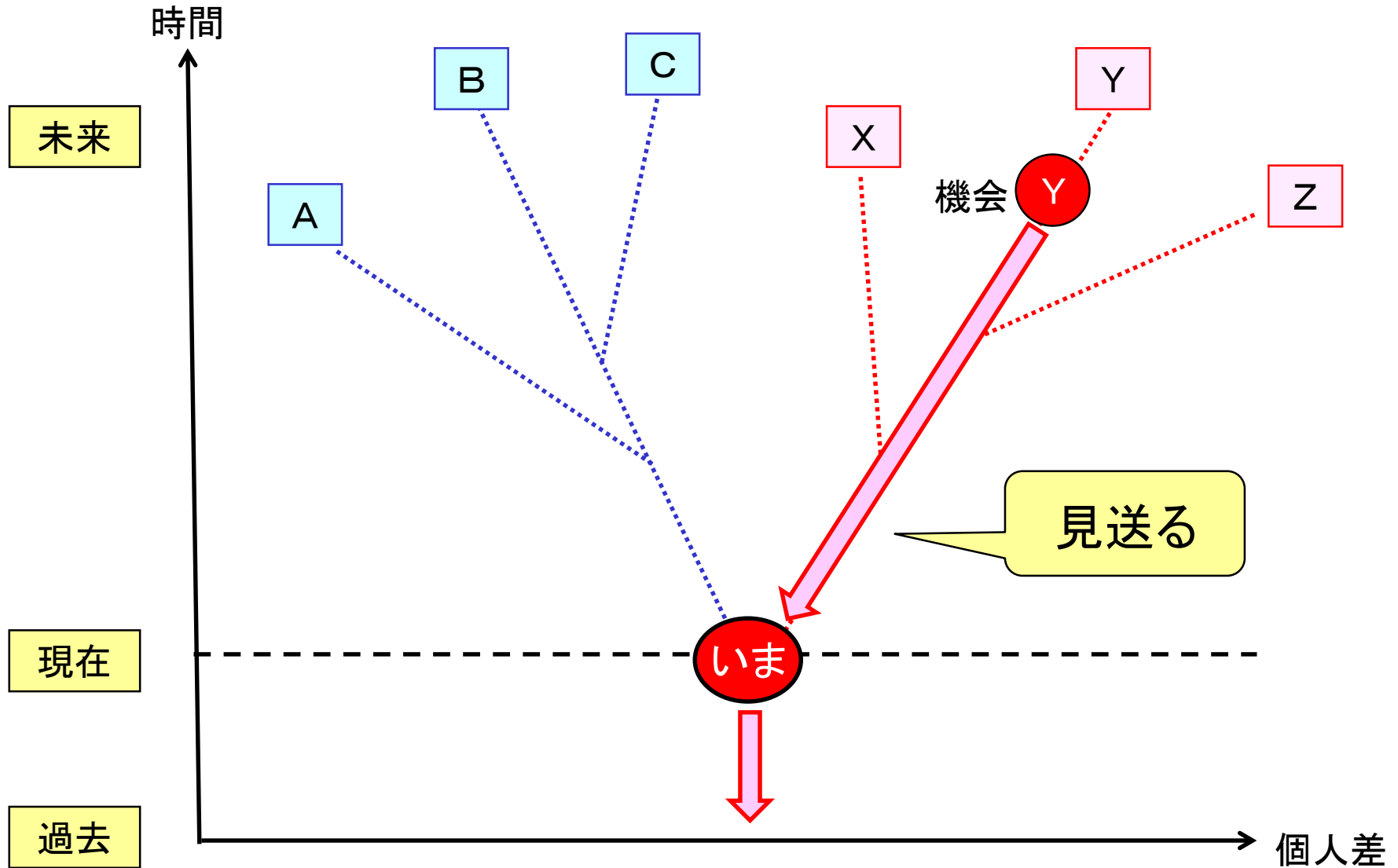
西洋人の時間（未来を予測する）



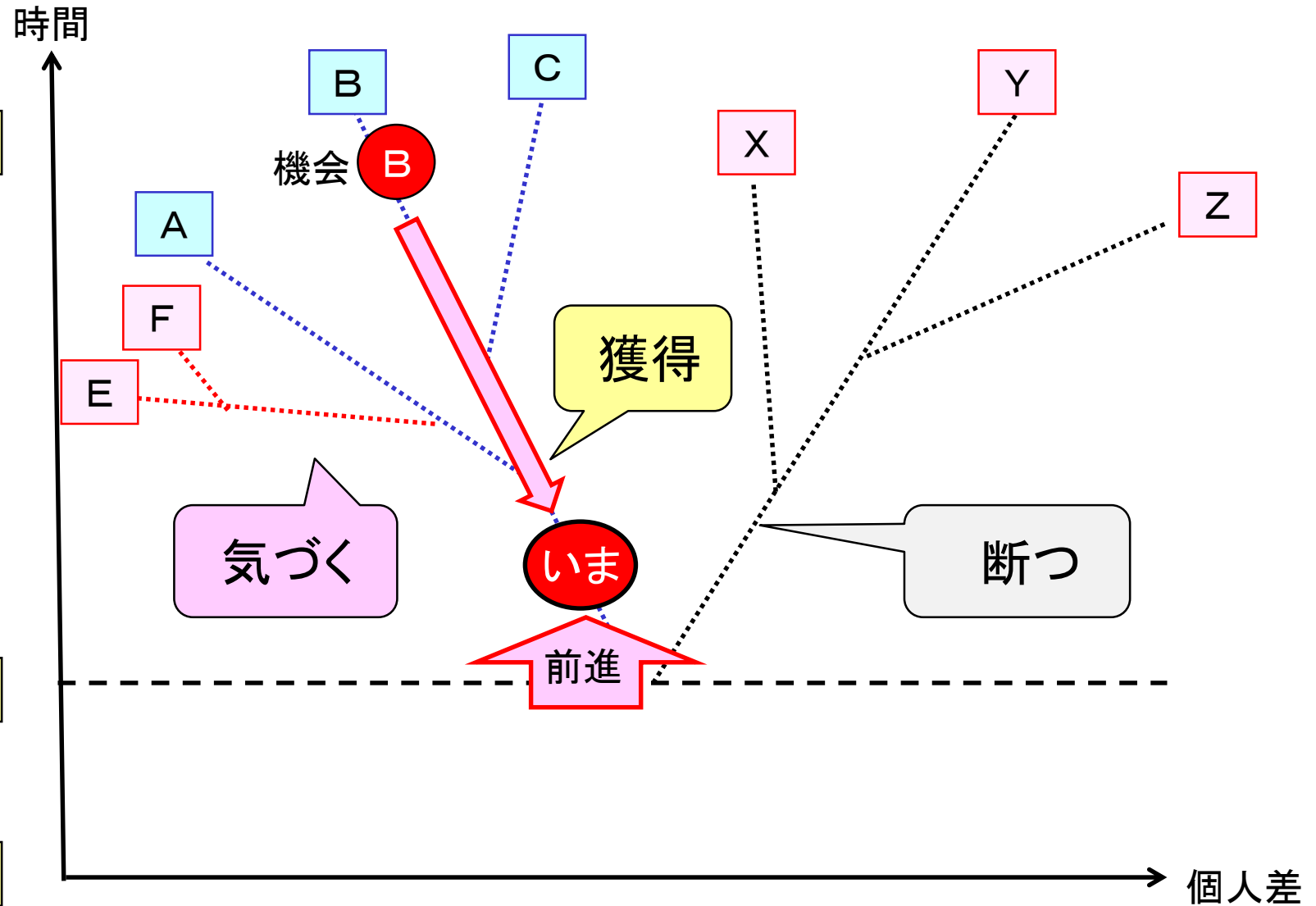
ユダヤ人の時間（未来を想定する）



未来を想定する（機会を見送る）



未来を想定する（機会を獲得する）



生まれ変わり始めた日本人

(中略)企業も変化し始めている。次の世代の人たちというのはデータ主義であり合理的であり、そういった人たちが社会の中心になる。コンピュータをはじめ新しいものに対する抵抗がまったくない世代の人たちが社会の中心になりつつあり、彼らはもともとの情報の取り方が違うわけだ。

そのことが日本の本当の意味での国際化において、非常に大きな意味を持ち始める。外圧がきかなくなってきたという言い方もできる。ここ20年の自信を失った日本人と日本社会において、「外国がこのように言っている」という脅しが非常に強い力を持っていた。

ところが新しい世代の人たちには、そうした脅しが効かなくなりつつある。たとえば「中国がこう言っている」という設問に対して、「それで？」と言ってしまえばそれで終わりなわけだ。だから「負け犬思考」はもうやめようと言いたい。「日本はこうする」ということが大事であり、それを軸にすえる経営者や企業を中心人物が増えることによって、世の中は変わっていく。

(次頁に続く)

『この残酷な世界で日本経済だけがなぜ復活できるのか』(渡邊哲也著)より

生まれ変わり始めた日本人

(中略)

世界で共通になった日本語がある。「カイゼン」である。それは、悪いところを一つひとつ直していったって、それを他の分野にも影響させて、取引先や供給先なども含めて全体に効率的な仕組みをつくっていくことである。

決してちやぶ台返しの「改革」や「革命」ではない。日本発のカイゼンが世界の製造業で当たり前の言葉になっている。その発祥の地である日本が、それを見ていないのだ。第3の矢においても、「やり続けることが重要である」。これは甘利経済再生相の言葉だ。

悪いことは直していく。足りないものは足していく。そして、できることをやっていく。それをやり続ければ、絶対に失敗しないというのがカイゼンの基本思想なのである。これを国民の思想ベースまで落としていくことができるかどうかというのが、アベノミクスの成功、ひいては日本復活の大前提となるのである。

『この残酷な世界で日本経済だけがなぜ復活できるのか』(渡邊哲也著)より